

「いつもありがとうございます」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ ほんの些細なことですが…

夏休みのとある昼下がり、私はバーガーショップで珈琲を飲んでいました。妻に頼まれ、美術館まで送り届けたあと、彼女が鑑賞し終わるまで時間潰しをしていたのです。不意に声を掛けられます。「新谷先生ですよ。僕は神高生なんですけど、先生の姿に気づいて…」と。『校長先生』じゃなくて『新谷先生』、これが単純に嬉しかったのですね。嬉しさのあまり求められるまま、私は2ショット写真に納まってしまいました。

「ひとり？」と私が尋ねると、「両親と一緒にいたのですが、『校長先生と話がしたい』って僕が言ったら、外で待っていてくれます」とのこと。ご家族のあたたかい関係性に口元が緩んでしまった私です。

また過日の昼休みは、開けっ放しの校長室のドアの向こうから「今、お時間いいですか？」と訊ねられました。「いいよ」と返事して室内に入ってもらうと、彼は自身の高校生活に対する戸惑いを率直に語ってくれました。これも嬉しかったですね。ひととお聞き終えて最後に訊ねました。「親御さんにはあなたの気持ち、伝えているのかな？」と。すると「はい、伝えています」との言葉。心から安心させてもらえる返事です。

本校でラグビー部の顧問をされた後、有馬高校の校長でご卒業された天知先生から、同僚だった頃に教わったことがあります。それは入学式の間でした。「ここに集まっている親子はそれぞれの15年をともに過ごし、この入学式を迎えているんです。だから僕ら教員はその子の今だけを見るんじゃなく、それぞれの15年を受け止め、向き合わないといけないと思うんです」と。その言葉は以来、私の大きな指針となりました。

長年、子ども達を支えてきた保護者の方々と教職員がともに集うPTA活動。それでも、近年は会員数の減少等から全国的にその活動は縮小傾向にあります。それでも保護者と教職員とが手を繋ぎ、子ども達に寄り添おうとする志はきわめて尊いものであり、大切にしたい文化のひとつであることは言うまでもありません。

昨年、近畿のPTA大会で、全盲のピアニストとして知られる辻井伸行さんのお母様の話を聴きました。『生まれて間もない頃は花見に連れて行くのは可哀想だと思っていました。でも、花びらを触ったり匂ったりすると喜ぶんです。私は「自分の物差しだけで判断していたんだな」と反省しました』

『生後8ヶ月。プーニンが弾くショパンの「英雄ポロネーズ」には興奮するのに、他の方が弾くピアノには反応しないんです。「違いの解る耳を持っているんだ」と思い、おもちゃのピアノを与えるとでたらめに弾き始めたので驚きました。3歳の頃には私が歌うと耳でコピーしてピアノを両手で弾いていました』

『それまでの私は日記に愚痴ばかり書いていました。でも、この時に「この子は天才かもしれない」と思い、実家にあったアップライトのピアノを取り寄せたんです。すると嬉々として鍵盤を叩き始めました』
『下を向いたままで生きて欲しくない、そう願っていました。でも、ピアノが彼を光りある世界に連れ出してくれました』『人間の可能性は凄いということを、私は我が子から教えてもらったんです』



20歳にして、アメリカで開催された第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールに出場。日本人初の優勝を果たした後のご活躍は皆さんご承知の通りです。伸行さんのご誕生から現在に至るまでの母親としての心の揺らぎを、保護者の方々と私達教職員がともに聴きする時間は本当に贅沢なものでした。

今年の全国のPTA大会においては大会実行委員長から「子どもたちの成長を支えるのは何よりも学校、保護者、地域の連携です」との話がありました。

幸いなことに本校では大きな行事の度に保護者の方々が集まってくださり、大きな支えとなっています。次は体育大会ですね。保護者の方々と共有する時間は笑顔溢れる、楽しい時間です。ともに生徒を支えていただき、ありがとうございます。

